（２）様式第９号（報告書）

（独立行政法人教職員支援機構委嘱事業）

教員の資質向上のための研修プログラム開発・実施支援事業報告書

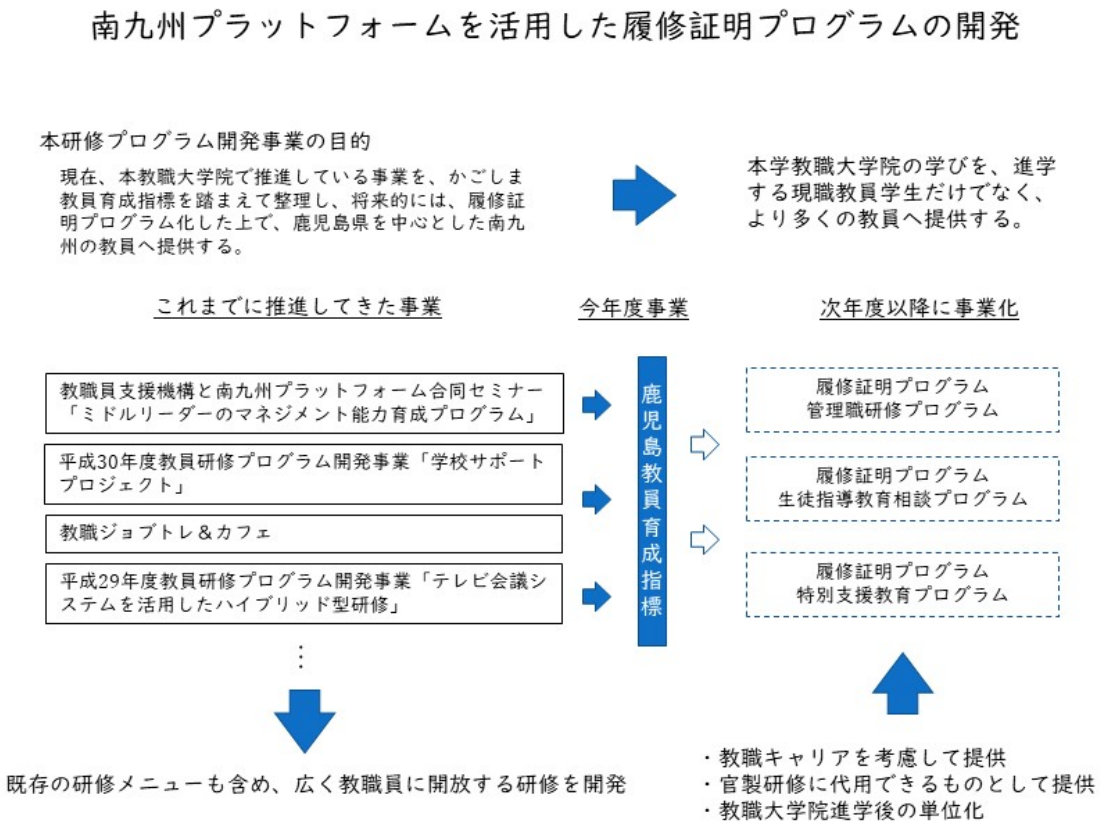
プログラム名	南九州プラットフォームを活用した教員研修プログラムの開発
プログラムの特徴	本プログラムでは、熊本大学との間で平成 29 年度に締結した南九州プラットフォームを中心に、鹿児島・熊本両県の教育委員会と連携し、教職員支援機構との共同で実施する研修講座を組み込むことで、将来的に履修証明プログラムを構成する研修を開発していく取組である。これらの研修については、鹿児島県においては、鹿児島教員育成指標との対応関係を検討しながら、教職大学院学生以外の現職教員に提供できるかどうかを検証した。教職大学院が提供する研修が、進学する教職員以外にも幅広く提供できる可能性を示唆できた。

令和２年３月

機関名　国立大学法人鹿児島大学
連携先　鹿児島県教育委員会

プログラムの全体概要

これまで、鹿児島県教育委員会との連携において、複数の教員研修プログラム開発を行ってきたが、それらを単独の研修メニューとして提供するのではなく、これらの研修を「鹿児島教員育成指標」を踏まえて、研修内容の評価を行い、次年度以降に履修証明プログラムとして、鹿児島大学教職大学院から提供できるようにしていく。今後、開発していく履修証明プログラムは、鹿児島県教育委員会と協議して、中堅教諭等資質向上研修（10 年目経験者研修）などの（悉皆研修、全国共通して行う研修）官制研修に代用できるものとして提供したり、教職大学院に進学した場合には単位化できるようなものにしていったりすることが目指される。



1　開発の目的・方法・組織

①　開発の目的

鹿児島大学教職大学院は、これまで鹿児島県教育委員会と連携して、いくつかの研修プログラム開発を行ってきた。これらの研修を将来的な教員キャリア形成に活用してもらうためには、体系化をしていく必要がある。そこで、より構成しやすくなった履修証明プログラム制度を活用し、教職大学院に進学しなくとも、教職大学院レベルの研修が受講できるように、これまでの研修ツールを整備することを目的とした。その際、鹿児島教員育成指標を用いて評価を行い、研修の内容を検証していくことを目的とした。

②　開発の方法

本学教職大学院が、これまで開発してきた研修メニューである「学校サポートプロジェクト」の４つのプロジェクト、鹿児島大学と熊本大学との間で締結された南九州プラットフォームと教職員支援機構との合同セミナー「ミドルリーダーのマネジメント能力育成プログラム」、本学教職大学院が連携している『かごしま授業維新会』主催の「教職ジョブトレ＆カフェ」といったメニューについて、引き続き開催し、鹿児島教員育成指標やアンケートを活用して、研修内容やレベルを評価した。

③　開発組織

No	所属・職名	氏　名	担当・役割	備　考
	【鹿児島大学教職大学院】			
1	教育学部長・研究科長	上谷順三郎	委 員 長	
2	教　授（専攻長）	有倉　巳幸	事務局長	事業全体の取りまとめ
3	准教授	廣瀬　真琴	事 務 局	学校ＳＰ（校務校内研修）
4	教　授	假屋園　昭彦	研究委員	学校ＳＰ（学びづくり）
5	〃	溝口　和宏	〃	学校ＳＰ（学びづくり）
6	〃	海江田　修誠	〃	
7	〃	原之園　哲哉	〃	
8	〃	迫田　孝志	〃	
9	准教授	山口　幸彦	〃	学校ＳＰ（取りまとめ）
10	〃	原田　義則	〃	学校ＳＰ（小中一貫教育）
11	〃	山本　朋弘	〃	
12	〃	関山　　徹	〃	学校ＳＰ（生徒指導）
13	〃	高谷　哲也	〃	学校ＳＰ（校務校内研修）
14	〃	奥山　茂樹	〃	
15	〃	山元　卓也	〃	
16	〃	髙味　　淳	〃	
	【県教育委員会】			
17	県教育庁義務教育課課長	山本　　悟	副委員長	
	同課企画生徒指導係	堀田　竜次	連携協議会委員	
18	【鹿児島市教育委員会】			
	学校教育課長	下江　嘉誉	連携協議会委員	
	【日置市教育委員会】			
	学校教育課長	渦尾　文輝	〃	
19	【いちき串木野市教育委員会】			
	学校教育課長	大迫　輝久	〃	学校ＳＰ（生徒指導）
20	【薩摩川内市教育委員会】			
	学校教育課長	村上　勝美	〃	学校ＳＰ（小中一貫）
21	【南さつま市教育委員会】			

	学校教育課長	伊口　秀樹	〃	
22	【南九州市教育委員会】			
	学校教育課長	田辺　源裕	〃	
	【各学校】			
23	鹿児島市立宮小学校校長	大戸　孝二	〃	学校ＳＰ（学びづくり）
24	鹿児島市立吉野東小学校校長	高峯　正一	〃	学校ＳＰ（校務校内研修）
25	鹿児島市立吉田南中学校	向田　伸子	〃	学校ＳＰ（校務校内研修）
26	鹿児島市立伊敷中学校	寺園　伸二	〃	教職ジョブトレ＆カフェ
27	日置市立妙円寺小学校校長	宮里　英樹	〃	学校ＳＰ（校務校内研修）
28	日置市立湯田小学校校長	下脇　　徹	〃	学校ＳＰ（校務校内研修）
29	いちき串木野市立市来小学校校長	桃北　紀和	〃	学校ＳＰ（校務校内研修）
30	いちき串木野市羽島小学校	藤田　柳生	〃	学校ＳＰ（学びづくり）
31	いちき串木野市串木野中学校	中村　　憲	〃	学校ＳＰ（生徒指導）
32	南九州市頴娃小学校	草留　久之	〃	学校ＳＰ（学びづくり）
33	薩摩川内市立川内北中学校校長	桑畑　明斎	〃	学校ＳＰ（小中一貫）
34	薩摩川内市立平成中学校校長	大園　　誉	〃	学校ＳＰ（小中一貫）
35	薩摩川内市立樋脇中学校校長	小牟禮　勉	〃	学校ＳＰ（小中一貫）
36	薩摩川内市立東郷学園校長	三戸瀬　智	〃	学校ＳＰ（小中一貫）

２　開発の実際とその成果

①ミドルリーダーのマネジメント能力育成プログラム

○研修の背景やねらい

昨年度に引き続き、鹿児島大学と熊本大学との間で締結された南九州プラットフォームと、教職員支援機構との合同セミナーとして実施された。本プログラムは、教職大学院レベルの学びを鹿児島、熊本両県の教員に提供する目的で企画された。本来ならば、つくばに出向かなければ受講できない講座を近隣で受けられるメリットがある。

○対象、人数、期間、会場、日程講師

主として、中堅教員を対象とし、今年度は鹿児島大学と熊本大学の教職大学院学生 12 名と、鹿児島、熊本両県の教員 28 名の計 40 名が受講した。日程については、8 月 6 日～8 日の予定であったが、台風の影響で 12 月 26 日～28 日に、鹿児島大学稲盛アカデミーで開催された。

日程講師は、前田光久（鹿児島県教育委員会教育次長）、北神正行（国士舘大学）、宮迫隆浩（教職員支援機構）、天笠　茂（千葉大学）、有倉巳幸（鹿児島大学）及び、NIS 大賞を受賞した徳之島町立母間小学校（発表者　富田幸政校長）と熊本県立教育センター（発表者　福山尚美指導主事）の事例発表を実施した。

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

基本的には、教職員支援機構の提案に基づき、研修項目を配置した。中堅教員が受講の中心となるため、マネジメント能力を高めるための研修項目を取り上げた。

○各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

※実施方法については、具体的に記述すること

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
リーダーの資質	1.5	学校のリーダーとして必要な資質及び役割を理解する	・鹿児島県の地域的特徴を踏まえた講話を実施した。鹿児島県のもつリソースや課題を取り上げ、リーダーとしての考え方や視点を提供した。 ・講義

			・配付資料：スライド資料ほか
組織マネジメント	3	学校運営について組織マネジメントの視点から理解する	・学校組織の特質を踏まえて、根拠となる法律などを取り上げ、「ミドルアップダウン・マネジメント」「分散型リーダーシップ」を有効に機能させるための取り組みなどを概説した。 ・講義、グループによる課題演習 ・配付資料：スライド資料、ワークシートほか
事例発表	3	学校等での優れた取組例を知り、学校での実践に活かす。	・徳之島町立母間小学校 学校の特色や良さを伸長させていくことを目指した「ICT を活用した遠隔授業」を中心に事例を提供した。「学力の２階建て授業」というグランドデザインを実現するためにすべての教職員が共有ビジョンをもてるしかけを紹介した。 ・熊本県立教育センター チーム学校を実現するために、「学校経営・運営」「学校改革（校務改革・授業改善）」「働き方改革」の 3 つの視点をバランス良く実行していくための方策を紹介した。 ・事例発表 ・配付資料：スライド資料
アクティブラーニング	3	主体的・対話的で深い学びを実現する上で求められる学びの捉え方、授業研究のあり方を学ぶ。	・学校において質の高い学びを実現するために必要な知見を紹介した。資質・能力を子供たちに身につけさせるための手段としての主体的・対話的で深い学び、及び授業研究で教師たちがつけるべき観（学習観・生徒観など）について、グループで検討した。 ・講義、グループによる課題演習 ・配付資料：スライド資料、ワークシートほか
カリキュラムマネジメント	3	社会に開かれた教育課程という視点からカリキュラムマネジメントの考え方を学ぶ。	・学習指導要領の改訂、社会の変化、これからの生徒が身につける能力等の背景を理解したうえでカリキュラムマネジメントを進めていくことの意義やその方策等について概説し、各学校で取り組む上での課題等について、グループに分かれて検討した。 ・講義、グループによる課題演習 ・配付資料：スライド資料、ワークシートほか
コーチング・ファシリテーション	1.5	対話や討論において必要なコーチング・ファシリテーションの方法を理解する	・組織開発を推進していく上で、学習する組織を作るための基本的な原理の紹介をし、対話や討論において必要なコーチング・ファシリテーションの方法を概説した。 ・講義 ・配付資料：スライド資料

※実施要項、テキスト（教材、レジメ、演習問題等）、その他参考となる資料添付すること。
※ＤＶＤ教材等を作成した場合は、当機構宛に郵送してください。

〇実施上の留意事項

3 日間通じてのセミナーであるため、熊本県からの参加者は、交通費や宿泊費を伴う。逆に、次年度は熊本大学教職大学院で実施される予定であるので、鹿児島県からの参加者に同様の負担が伴う。時期の設定によっては台風等の影響が生じる。

〇研修の評価方法、評価結果

研修の運営に関するアンケートを実施、併せて、鹿児島教員育成指標を踏まえて、各研修がどの資質を向上させると考えるかについてチェックを求めた。以下に自由記述の結果（一部）を紹介する。

１　鹿児島におけるスクールリーダーの役割（前田光久教育次長）

・鹿児島県の特色をふまえスクールリーダーとしていかにネットワークづくりをしていくかその大切さを学べました。そして各学校で人と人をつなぐためのヒントをいただけました。一人ひとりに個性があって、課題をもつ教師同士をどう結び付けるのかそのための校内研修を学校で実施していきたいです。

・地方の少子化や特別支援学級の増加等、学校現場の課題を数値で見ると、「地域に開かれた学校教育」の必要性を感じました。教員一人ひとりそれぞれ得意分野を活かし、さらには地域の人、企業、様々な団体の資源を生かし、子供たちを育てていくことが重要だと感じました。そのためにも様々な人とコミュニケーションをとり、地域と学校が一体となり、教育を進めていきたいと思います。

２　学校組織マネジメント：北神正行

・現在の学校で２年目の勤務となり、１年間の経験から特色のある教育活動と改善しなければならない活動が私の中で形作られています。しかし、どのようにして強みを伸ばし、弱みを改善すればよいのか悩んでいました。今回の講座でミドルとしてのマネジメント力について教えていただいたことを活かし、まずは仲間を探してみたいと思います。多くの仲間とそれぞれの立場、仕事（分掌）からアプローチして変えていけたらと思います。

・学校組織マネジメントについて、法的な側面から捉える機会となりました。また、学力、教員、経営の質という観点からの検証や「変わる」「見つける」「つなぐ」の３つの視点など、次年度に向けて学校の教育目標等を検討するうえで大変貴重なお話をうかがうことができました。「ミドルアップダウン・マネジメント」「分散型リーダーシップ」を有効に機能させるための取り組みを進めていきたいと思います。人が育つ「学校」となるために。

３　事例発表（母間小：富田　熊本県教育センター：福山　助言：北神）

・その学校の特色や良さを伸ばそうと「ICT を活用した遠隔授業」を軸に取り組まれている実践から変化を学校現場に取り入れることの重要さを学べました。「学力の２階建て授業」というグランドデザインを実現するためにもすべての職員で共有ビジョンをもっていける仕組みが必要で、同様の仕組みを原籍校に組み込みたいです。私の意識に「長時間勤務が尊い」という観があったことを認識し、そこから変えていかないといけないと思いました。どのように勤務校で働き方改革していくかが課題です。また、福山先生のプレゼンの工夫、伝え方に細かな配慮があり、自分もその伝え方についても方法だけでなく、考え方も取り入れていきたいです。

・離島や少人数学級の課題は、人口減少社会が進む日本ではこれから様々な地域で同じような課題が起きてくると思います。将来の学校のイメージがつかめたような気がします。新しいことにチャレンジする時のリーダーの決断力と行政や他校など様々な団体と現場の職員を結ぶ行動力を感じました。本校でも新しいチャレンジをしていきたいと思います。

４　アクティブラーニングを核にした新たな学びの推進（宮迫隆浩）

・主体的・対話的で深い学びは手段であるということに気づかないまま、アクティブラーニングに目的を置いている授業実践が多い。今日の講座では学習指導要領改訂の背景から資質・能力をとらえて授業改善をすすめていく重要性を学ぶことができました。また、授業研究の演習を通して子供の学びをただ見取るだけでなく、資質・能力と関連させて見取る（分析する）ことが大切であることを学ぶことができました。

・教師の見る力の向上が大切であると感じた。授業をしっかりと児童生徒の学びから見取ることが必要である。また、校内の研修体制を充実させることがやはり大事である。子供の学ぶ姿をしっかりと見取ることで教師同士が議論することで、少しずつ教師の子供の学びを見取る力が向上すると思う。

５　特色ある学校づくりのためのカリキュラムマネジメント（天笠　茂）
・教育課程全体で考え、内容や方法を変えていくだけでなく、組織も変えていくという発想がなかった。新しい学習指導要領を動かしていく組織の視点も大切にしたいと思った。題材配列表というツールもぜひ活用し。先生方の協働を促し、組織マネジメントを実践したいと思った。
・三日間を通してキーワードとして「つなぐ」「みんなで」「一緒に」「方策手段」という言葉が頭を駆け回っている。来年度から小学校より新学習指導要領がスタートする。毎回新しく変わるたびに新しく入ってきた部分、今回でいえば、主体的・対話的で深い学び、カリキュラムマネジメント、プログラミング教育 etc そちらについつい取り組みたくなるが、今日の天笠先生の話を聞いて、その背景、理念をしっかりと土台として持っておかないと空回りすることがよく分かりました。方策であり手段であることがよく理解できました。
６　コーチングとファシリテーション（有倉巳幸）
・コーチングやファシリテーションについては、学校現場では研修機会が少ないので、今回の講義は貴重であった。自分は教頭なので職員へのコーチングや会議・研修の場においてファシリテーターとなれるよう学びを振り返り、活用したい。
・ミドルリーダーとして組織においてコーチングとファシリテーションを効果的に使うことが組織をうごかすことにつながり、学習する組織に成長していくと思いました。ミドルアップダウン・マネジメントが大切であることを感じることができました。

・鹿児島教員育成指標による研修内容のチェック（回答者 37 名；管理職・指導主事７名、教諭・主幹教諭 27 名、養護教諭３名）肯定率 50%以上を列挙
１　鹿児島におけるスクールリーダーの役割（前田光久教育次長）
連携協働力（校務の遂行・運営 20 名（53%）、同僚性と自らの成長 27 名（73%）、保護者・地域等の連携 22 名（59%））、課題対応力（新たな課題への対応 24 名（65%））
２　学校組織マネジメント：北神正行
連携協働力（校務の遂行・運営 30 名（81%）、同僚性と自らの成長 30 名（81%）、保護者・地域等の連携 23 名（62%））、課題対応力（新たな課題への対応 27 名（73%））
３　事例発表（母間小：富田　熊本県教育センター：福山　助言：北神）
連携協働力（同僚性と自らの成長 22 名（59%））、課題対応力（情報管理と ICT 活用 24 名（65%）、複式・少人数指導の充実 22 名（59%）、新たな課題への対応 21 名（57%））
４　アクティブラーニングを核にした新たな学びの推進（宮迫隆浩）
学習指導力（学習指導の構想・実施 24 名（65%）、学習指導の展開 25 名（68%）、学習指導の評価・改善 27 名（73%））
５　特色ある学校づくりのためのカリキュラムマネジメント（天笠　茂）
学習指導力（学習指導の構想・実施 22 名（59%））、連携協働力（校務の遂行・運営 25 名（68%）、同僚性と自らの成長 22 名（59%））、課題対応力（新たな課題への対応 24 名（65%））
６　コーチングとファシリテーション（有倉巳幸）
生徒指導力（児童・生徒の理解 21 名（57%））、連携協働力（同僚性と自らの成長 27 名（73%））

〇研修実施上の課題
研修の運営に関するアンケートでも運営、研修期間、会場については「A 大変良かった」、「B おおむねよかった」の回答が９割を超えていた。日程（時間配分）では、若干その割合が下がっているが、受講者にとって満足のいくセミナー運営ができたと考える。研修講座の広報をさらに充実させることが求められる。加えて、SDGs と教育の関連、すべての教育で育む読解力、他県教師間の交流（授業研究等）、関東地方の学校の事例を知りたいなどの要望が上がってい

たので、今後、内容を整理して複数のプログラムを提供することを目指したい。

②学校サポートプロジェクト

鹿児島大学教職大学院が連携している、鹿児島県教育委員会及び９市町村教育委員会に対し、教職大学院がもつコンサルテーション機能およびシンクタンク機能を活用し、鹿児島県内の教育委員会や学校が企画する教員研修を持続的にかつ多方面から支援していく研修プログラムを開発することを目的とする。

〇対象、人数、期間、会場、日程講師

令和元年度の連携協議会は１０月、２月の年２回、実習連携プロジェクト部会を１回計画したが、内容については下記の通り。

(1)　第１回連携協議会

・　日時　令和元年１０月２９日（火）
・　会場　鹿児島大学教育学部第１講義棟１０１号室・１０２号室
・　式次第　①　開会のあいさつ
　　②　事業説明
　　③　ワークショップ
　　④　FD・SD 講演会
　　講師　吉澤　寛之先生
　　（岐阜大学教職大学院）
　　⑤　閉会のあいさつ

(2)　第２回連絡協議会並びに第１回実習プロジェクト部会

・　日時　令和２年２月２１日（金）
・　会場　鹿児島大学院連合農学研究科　３階　会議室
・　式次第　①　開会のあいさつ
　　②　協議
　　・　令和元年度実習の報告について
　　・　令和２年度実習の計画案について
　　・　その他
　　③　閉会のあいさつ

(3)　**各プロジェクトの実施状況**

プロジェクト名	学　校　名	サポート回数	実習時数	参加院生延べ数
①学びづくり	鹿児島市立宮小学校	7	14	16
〃	いちき串木野市羽島小学校	8	31	28
〃	南九州市立頴娃小学校	3	3	4
②生徒指導	いちき串木野市教育委員会	9	36	13
〃	いちき串木野市立串木野中学校	8	0	0
③校務・校内研修	鹿児島市立吉野東小学校	3	9	3
〃	日置市立妙円寺小学校	3	9	0
〃	日置市立湯田小学校	4	12	9
〃	いちき串木野市立市来小学校	8	24	9

〃	鹿児島市立吉田南中学校	8	24	16
④小・中一貫教育	薩摩川内市教育委員会	3	12	12
〃	薩摩川内市立川内北中学校	2	4	8
〃	薩摩川内市立平成中学校	2	9	8
〃	薩摩川内市立樋脇中学校	2	11	8
〃	薩摩川内市立東郷学園	2	9	8
計		72	207	142

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

昨年度に引き続き、鹿児島県に求められる教育課題を、各教育委員会や学校で探究していくために、以下の４つのプロジェクトを立ち上げた。各プロジェクトには、プロジェクトリーダーを置き、学校と協議してニーズを把握し、取組をサポートする。

⑴　学びづくりサポートプロジェクト
⑵　生徒指導サポートプロジェクト
⑶　校務・校内研修充実サポートプロジェクト
⑷　小中一貫教育サポートプロジェクト

○各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

⑴　学びづくりサポートプロジェクト

○　サポート校

鹿児島市立宮小学校・いちき串木野市立羽島小学校・南九州市立頴娃小学校

○　目　的

ア　鹿児島市立宮小学校

・平成 30 年度に引き続き、国語科の授業を通した研究のサポート

・平成 31 年度鹿児島市教育委員会研究協力校研究公開を予定

イ　いちき串木野市立羽島小学校

・学校の研修の方向性を確立し、学校の課題解決のための国語科の指導法改善に資するようにするためのサポート

・研究授業等を通して、教員一人一人の授業力を向上させる。

ウ　南九州市立頴娃小学校

・校内研究の総合テーマとして「キャリア教育」をめざし、学ぶ力・心の教育・体験活動の取組を３本柱として、国語科を各教科のマザーボード（基礎）ととらえ、学ぶ力をつける授業づくりをサポートする

・特に、CAP-D の理論による授業指導法・授業研究

○　内　容

校内研修会・研究授業・終日の授業参観等を通して，研究テーマの解明に向けての校内研修の運営や校内共通実践事項の徹底、子供の変容等について観察・検証しながら、各学校における教児一体となった学びの実現について研修を深めている。

○　日　程

令和元年６月～令和 2 年 2 月に合計 18 回（3 校），48 時間。6/3（2 時間），5/27（3 時間），6/17（5 時間），8/1（3 時間），8/21（5 時間），8/30（5 時間），9/30（5 時間），10/28（4 時間）。

⑵　生徒指導サポートプロジェクト

教育支援センターのサポート

○　目的と内容

いちき串木野市が運営する教育支援センター（適応指導教室）の活動の充実を図るため、そこでの学習指導やコミュニケーション活動、学校・家庭・地域との連携等のあり方について、教育支援センターのスタッフ（指導員・SSW・ 指導主事等）と大学教員・教職大学院生が協働して通級生と関わりながら、個々の通級生の様子をケーススタディ的に振り返り、それぞれの立場を活かして関わりの仕方や運営面の改善を試みている。

○　日　程（1/29 現在）

令和元年 9 月～12 月に合計 9 回（36 時間，1 回 4 時間；交流自体は 3 時間）9/19（4 時間），9/27（4 時間），9/30（4 時間），10/28（4 時間），11/11（4 時間），11/18（4 時間），12/2（4 時間），12/9（4 時間），12/16（4 時間），全日程終了

○　場　所

いちき串木野市教育支援センター

校内適応支援委員会のサポート

○　目的と内容

校内適応支援委員会における不登校（傾向）生徒に関する情報共有と支援方略の立案をより効果的に行うために、大学教員がアドバイザーとして定期的に会議に参加して、個々への生徒のアプローチの仕方とチーム支援のあり方について共に議論しながら改善を試みている。

○　日　程（1/29 現在）

令和元年５月～令和２年２月に合計８回（1 回 1 時間）

5/28，7/2，9/10，10/29，11/19，12/10，1/21，計 7 回終了，残り 1 回予定

○　場　所

いちき串木野市立市来中学校

⑶　校務・校内研修充実サポートプロジェクト

○　サポート校

鹿児島市立吉野東小学校，日置市立妙円寺小学校，日置市立湯田小学校，いちき串木野市立市来小学校，鹿児島市立吉田南中学校

○　目　的

各学校の校内研修ならびに授業研究の充実を目指した取組の支援ならびに企画･運営における協働サポート。

ア　鹿児島市立吉野東小学校

・　校内研修の中でもテーマ研究における研究の体制（組織）づくりのサポート

・　研修を活性化させていく方法

イ　日置市立妙円寺小学校

・　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のサポート

・　新学習指導要領の趣旨を踏まえた理論研究や授業実践

ウ　日置市立湯田小学校

・　ＰＤＣＡサイクルを取り入れた組織的・協働的な校内研修にするための企画・運営のサポート

エ　いちき串木野市立市来小学校

・　「一人一人を大切にした授業の充実～省察を通した教師力の向上～」

・　対話を通した研修の充実（個別の課題設定から自己評価まで）のサポート

オ　鹿児島市立吉田南中学校

・　各教科における主体的・対話的で深い学びについての研究

・　県教育総合センターの提携校として毎年研究公開

○　内　容

それぞれのサポート校においては、校内研修への職員の主体的・能動的な参加、校内研修内での職員間の対話的学びの充実、指導案検討・模擬授業における子どもの視点からの議論、授業研究を参加者全員の学びの機会とするための企画・運営上の工夫等についてのサポートを行った。また、各学校に教職大学院院生が開発実践実習Ｉの実習として参加し、外部参加者との協働的な学びが生起し、当該校の教員の学びの広がりや刺激が実現している。

○　日　程

5 月 20 日～2 月 1 日までにのべ 23 回のサポートを実施した。令和元年 5 月 20 日～令和 2 年 3 月 2 日【5 校 26 回予定】

⑷　小中一貫教育サポートプロジェクト

○　サポート校

薩摩川内市立川内北中学校, 薩摩川内市立平成中学校, 薩摩川内市立樋脇中学校，薩摩川内市立東郷学園

○　目　的

各中学校区の特色を生かした教育課程の編成　　やカリキュラムマネジメントの工夫について，これまでの各中学校区における小中一貫教育を基にしながら、学力向上に視点をおいた取組や、各中学校区の課題を改善していく取組についての研究および実践のサポート

令和元年度の小中一貫教育研究公開（川内北中学校区・平成中学校区・樋脇中学校区・開成中学校区）研究内容や実践についてのサポート

○　内　容

校内研修会、研究授業、終日の授業参観等を通して、教師間の「学校文化」の共有化、小中一貫したカリキュラムの編成、児童生徒間連携の「質」と「量」の確保、地域人材を活用した「小中縦割り編成による総合的な学習の時間」の在り方等について、学校職員と一緒に研究を深める。また、管理職のリーダーシップや、ミドルリーダーの育成についても考察を深める。

○　日　程

令和元年 4 月～令和 2 年 2 月に合計 13 回（4 中学校区・市教委），45 時間。4/25（4 時間），7/25（5 時間），8/1（5 時間），8/26（5 時間），10/12（4 時間），11/13（ 8 時間），2/5（6 時間），2/14（8 時間）

○実施上の留意事項

・学校サポートプロジェクトは、2 年の実施を通して、新しい形での教職員の研修プログラムとして、一定の評価ができるものと考える。しかし、プロジェクトそのものが教職員支援機構の研究助成の中で実施されたものであるため、継続のためには実施主体の各教育委員会に予算計上を依頼することも検討する必要がある。

○研修の評価方法、評価結果

＜学びづくりプロジェクト＞

・国語科を柱とした校内研修では、平成 29 年版学習指導要領の趣旨を実現する確かな理論と豊かな実践が展開され、同時に子供の成長・変容に手ごたえを感じる教職員の姿があった。この

雰囲気は、学校の温かな雰囲気の醸成にも繋がっていった。
・参加した実習生が毎回提出されレポートを見ると、「子供たちの変容（学力向上）」「教職員の笑顔」「研修を通した学校力の高まり」が多く記載されており，本実習の目的を達成することができた。
・学校サポートでは，学校の要求に応えていくことを基本とし、指導案検討・研究授業後の指導助言などを行った。
・また、実習生が参加せず、大学教員のみのサポートも実施した。学校の年間研修計画に基づいた研究授業やテーマ研修で、学校の依頼に応じたコーディネートや指導助言を行った。

＜生徒指導プロジェクト＞

・教育支援センターのサポートにおいては、院生や大学教員が不登校生徒の支援に加わることにより、開発的カウンセリングに依拠したエクササイズを毎回実施することにより、生徒のコミュニケーション・スキルや他者理解・自己理解・自己開示等の向上に寄与した。また、学習の支援を指導員と共に行うことによって、学習指導をよりきめ細かくすることができた。院生の学びとしても、不登校生徒の実態についての知見を深めただけでなく、学校内に閉じない組織的な取組の必要性について実感をもって理解し、教職大学院での授業と結びつけることができた。
・校内適応支援委員会のサポートにおいては、大学教員が定期的に加わり情報の整理ツールを提供することによって、情報共有の時間短縮化と支援方略立案の活性化に寄与できた。また、大学教員としても、組織的対応を進めていく際のさまざまな校内外の実際的な工夫を知ることができた。

＜校務・校内研修プロジェクト＞

・各学校の研修に参画したり、管理職や研修に関わるミドルリーダー教師へのインタビューを行ったりすることで、県内の多様な事例から、具体的に探究課題に関する情報やデータを集めることができた。現在、それらをもとに、自校等への還元方法などについて検討を重ねている。

＜小中一貫教育プロジェクト＞

・小・中の連携については、平成 29 年版学習指導要領で強調され、鹿児島県でも多くの市町村が取り組んでいる。加えてコミュニティ・スクールの設立・運営についても，重視されてきた。
・実習生が毎回提出するレポートには，県内でも先駆けて展開されてきた、薩摩川内市小中一貫教育やコミュニティ・スクールの成果等について記載されていた。また小・中合同の研修会や研究公開で見られた児童生徒の変容、小中教員の連携、地域の高まり等から、市教委や管理職の願いやカリキュラムマネジメントの効果等についても実感していた。
・なお，学校サポートでは、児童生徒の活動や教員間の連携を観察することを基本とし、求めに応じて指導助言を行った。

〇研修実施上の課題

＜学びづくりプロジェクト＞

・鹿児島県内の校内研修日等は，月曜日が多いことを想定していたのだが、研究公開日等は他の曜日に開催されることもあり、大学院の授業との調整が難しかった。また、教員のみのサポートは具体的な研修内容とサポート内容の確認が十分な出なかったために、資料の準備等、もっと充実したサポートにするための積極的な支援を検討していく必要がある。

＜生徒指導プロジェクト＞

・教育支援センターのサポートにおいては、さらに継続的に生徒と関わることによって、より深い生徒理解に根ざした支援が可能になると思われる。また、指導員から講話をしていただく等の機会があれば、その的確で柔軟な指導のあり方をより具体的に院生が理解できると思われる。
・校内適応支援委員会のサポートにおいては、より簡便な効率化・活性化の方法を見きわめ、引き継いでいく必要がある。また、成功事例の共有・波及の仕方について検討できるとよいか

もしれない。

＜校務・校内研修プロジェクト＞

・多様な事例に接することができた分、事例の集約をどのように進めるかについては、次年度以降の課題である。例えば、各学校の取組みの共通点や差異点を整理し、その背景について整理することで学びを深める等、学内での探究に関する指導について改善をはかる必要がある。

＜小中一貫教育プロジェクト＞

・鹿児島県内の研修日等は、月曜日が多いことを想定していたのだが、市教委主催事業や研究公開日等は他の曜日に開催されることもあり、大学院の授業との調整が難しかった。

③教職ジョブトレ＆カフェ

鹿児島大学教育学部の代用附属学校である鹿児島市立伊敷中学校が中心となって立ち上げた「かごしま授業維新会」の企画に、鹿児島大学教職大学院として運営をサポートした。学校現場の教員がフランクに参加でき、かつ、最新の研修を学べる機会に協力し、多くの参加者の資質向上に資することが目的である。

〇対象、人数、期間、会場、日程講師

第１回 2019 年 8 月 9 日（金）13：00～17：00
参加者 41 名、会場：鹿児島市立伊敷中学校
講師：長野県教育委員会学びの改革支援課義務教育係指導主事　谷内祐樹氏

第２回 2019 年 12 月 10 日（火）10：00～16：00
参加者 30 名、会場：鹿児島市立伊敷中学校
講師：鹿児島大学教職大学院准教授　廣瀬真琴氏

第３回 2020 年 2 月 22 日（土）13：00～17：00
参加者 58 名、会場：鹿児島市立伊敷中学校
実践発表：兵庫教育大学附属中学校、石川県能美市立辰口中学校、鹿児島市立伊敷中学校

〇各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

・生徒の目線から学びを見取るという点から、そのポイントについて検討する機会を参加者により多く提供する。

〇各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

※実施方法については、具体的に記述すること

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
授業の見取り	4	授業分析の方法を学ぶ	単元デザインとともに、英語の授業を視聴した後、子どもの学びを参加者がグループに分かれて分析を行う。ポストイットを使用し、青を単元のデザイン、ピンクを子どもの姿、黄色を教師の関わりとして書き出し、可視化していった。 当日は、集合型の研修から個別型の研修に代わる時台を捉えて作成された信州型ユニバーサルデザイン 1.0 の紹介もあった。
授業の見取り	4	授業分析の方法を学ぶ	Instructional Round in Education(IR)という複数の学校や複数の授業を観察し、そこから実践上の課題や解決策を考えていく手法の紹介があった。この手法では、授業中の子どもの言動、教師の言動、

			授業内容という三つの相互作用に着目して授業分析を行うものである。 グループに分かれて、「学校の実践上の課題」「本時で目指す子どもの姿」「子どもの姿へのアプローチ」について、①事実を確認する、②整理・分析する、③子どもの立場になって推測する、④これからのことを考えるという流れで検討を行った。
カリキュラムマネジメント	4	アクティブラーニングに関する理解を深める	クロスカリキュラムを取り入れ、総合的な学習の時間を中心に各教科等を「つなぐ・つなげる」実践の報告、目指す生徒像をルーブリックにまとめ、教師だけでなく生徒や保護者に共有しているという取組などの実践発表を行った。 ワークショップでは、資質・能力の育成に向けた手段としてカリキュラムマネジメントとアクティブラーニングを位置づけ、主体的・対話的で深い学びの授業改善の視点から検討を行った。

※実施要項、テキスト（教材、レジメ、演習問題等）、その他参考となる資料添付すること。
※ＤＶＤ教材等を作成した場合は、当機構宛に郵送してください。

○実施上の留意事項

フランクに参加できる研修という位置づけであるので、学びたいという意思をもって参加する教員が中心となる。形式張らないように配慮することが必要である。

○研修の評価方法、評価結果

研修後にアンケートを実施した。以下に自由記述の結果を抜粋する。

第１回　学びを見取る！！懇談会！！

「授業者と指導助言者という２つの視点から子どもの学習の見取りをどのように行えばよいのか、たくさんのヒントを得ることができました。まずは自分自身の授業の中で子どもの表情やつぶやき、それらの背景にある実態を見取っていきたい。」

第２回　主体的・対話的で深い授業分析会

「授業研究に視点を置いた研修は初めてでした。初めての方法で戸惑うことが多くありましたが、大変勉強になりました。生徒を見ることを意識していたつもりでしたが、もっと観察する必要性を感じました。」

第３回　カリ・マネを語る会　～つながることで資質・能力の育成へ～

「目的や意図を常に意識しながら授業づくりをするのとそうでないのは，教育効果が大きく異なると思います。私自身学び続けたいと強く思いました。」「子供たちの思考の流れにそって授業を行うことが改めて大切だと思いました。」

○研修実施上の課題

インフォーマルでフランクに参加できるとは言え、講師を県外から招聘して行われる研修となるので、ある程度、予算を計上して実施することになる。今回は、参加料は取らなかったが、継続するためには、恒常的に予算措置をする必要がある。

３　連携による研修についての考察
（連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等）

南九州プラットフォームを活用するという点では、昨年度からスタートさせた合同セミナーについては、一定程度の成果は得られたと言える。決して多くはなかったが、熊本大学教職大学院や熊本県からも参加してもらえた。事前に熊本大学と打ち合わせ、熊本県教育委員会及び熊本市教育委員会にも広報することで、周知を図れた。本合同セミナーについては、来年度は熊本大学教職大学院で開催されるため、今年度の連携協議会に熊本大学の副学部長に参加してもらい、次年度の開催に向けて意見交換を行った。本合同セミナーは県を超えて実施されるので開催県に参加者が偏ると思われるが、両県で開催が難しいテーマ（学校経営やカリキュラムマネジメントなど）について教職員支援機構の協力を得て引き続き開催したいと考える。

学校サポートプロジェクトについては、南九州プラットフォームの活用は行われなかったが、今後、このノウハウを熊本大学教職大学院にも提供したい。両県ともへき地を多く抱え、両県とも一部では遠隔授業の取組も行われている。今後は、こうした取組を取り入れて研修の質向上を図りたい。

教職ジョブトレ＆カフェについては、熊本県も含め、県外からの参加者も得られた。今後、個々の教員が育成指標をもとに、資質能力を自己評価し、自分に必要な研修を選べるように、メニューを提供する必要がある。

連携を推進・維持していくためには、定期的なコミュニケーションが必要であると言える。県教育委員会とも熊本大学教職大学院とも定期的な協議を引き続き進めて行きたいと考える。

今後は、これらのメニューを充実させて、本学教職大学院で履修証明プログラムを提供できるように、これまで企画してきた他の取組（公開講座や教員免許更新講習など）も取り入れて準備していきたい。

４　その他

［キーワード］ミドルリーダー、合同セミナー、組織マネジメント、アクティブラーニング、カリキュラムマネジメント、学校サポートプロジェクト、学びづくり、校務・校内研修、小中一貫教育、生徒指導、授業研究、教職大学院

［人数規模］（補足事項　現地教員及び教職大学院院生の合計数）

①合同セミナー（ミドルリーダーのマネジメント能力育成プログラム）
A．10 名未満　B．11～20 名　(C.) 21～50 名　D．51 名以上

②学びづくりサポートプロジェクト
A．10 名未満　B．11～20 名　(C.) 21～50 名　D．51 名以上

③生徒指導サポートプロジェクト（教育支援センター）
(A.) 10 名未満　B．11～20 名　C．21～50 名　D．51 名以上

④校務・校内研修サポートプロジェクト
A．10 名未満　B．11～20 名　(C.) 21～50 名　D．51 名以上

⑤小中一貫教育サポートプロジェクト
A．10 名未満　B．11～20 名　(C.) 21～50 名　D．51 名以上

⑥教職ジョブトレ＆カフェ
A．10 名未満　B．11～20 名　(C.) 21～50 名　D．51 名以上

［研修日数（回数）］（補足事項　教職大学院の学生にとっての研修回数は 11 回以上）

①合同セミナー（ミドルリーダーのマネジメント能力育成プログラム）

Ａ．１日以内　Ⓑ．２～３日　Ｃ．４～10 日　Ｄ．11 日以上
（１回）　（２～３回）　（４～10 回）　（11 回以上）

②学びづくりサポートプロジェクト

Ａ．１日以内　Ｂ．２～３日　Ⓒ．４～10 日　Ｄ．11 日以上
（１回）　（２～３回）　（４～10 回）　（11 回以上）

③生徒指導サポートプロジェクト

Ａ．１日以内　Ⓑ．２～３日　Ｃ．４～10 日　Ｄ．11 日以上
（１回）　（２～３回）　（４～10 回）　（11 回以上）

④校務・校内研修サポートプロジェクト

Ａ．１日以内　Ｂ．２～３日　Ⓒ．４～10 日　Ｄ．11 日以上
（１回）　（２～３回）　（４～10 回）　（11 回以上）

⑤小中一貫教育サポートプロジェクト

Ａ．１日以内　Ｂ．２～３日　Ⓒ．４～10 日　Ｄ．11 日以上
（１回）　（２～３回）　（４～10 回）　（11 回以上）

⑥教職ジョブトレ＆カフェ

Ａ．１日以内　Ⓑ．２～３日　Ｃ．４～10 日　Ｄ．11 日以上
（１回）　（２～３回）　（４～10 回）　（11 回以上）

【担当者連絡先】

●実施機関　※実施した大学名又は教育委員会名等を記載すること

実施機関名		国立大学法人鹿児島大学
所在地		〒890-0065 鹿児島市郡元１丁目２１－２４
事務担当者	**所属・職名**	鹿児島大学大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻・専攻長
	氏名（ふりがな）	有倉　巳幸　（　ゆうくら　みゆき　）
	事務連絡等送付先	〒890-0065 鹿児島市郡元１丁目２０－６
	TEL/FAX	099-285-7923
	E-mail	dpte2@edu.kagoshima-u.ac.jp

●連携機関　※共同で実施した機関名を記載すること

連携機関名		熊本大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻
所在地		〒860-8555 熊本市中央区黒髪２丁目４０－１
事務担当者	**所属・職名**	熊本大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻・主任
	氏名（ふりがな）	藤中　隆久　（ふじなか　たかひさ）
	事務連絡等送付先	同上
	TEL/FAX	096-342-2636
	E-mail	fujinaka@educ.kumamoto-t.ac.jp